

第 11 講 クセルクセスの実績

ギリシア遠征に際して、全く実績のない君主ではなかった

エジプトとバビロンの反乱を鎮圧。

自ら遠征軍を指揮し、戦場に自らをさらしている。

ペルシア側の史料・・・軍を率いてエジプトに進攻し、反乱を平定。

ギリシア側の史料・・・テルモピュライやサラミスで戦闘を観戦し、陣頭指揮。

ダレイオスやキューロスに比べて劣っていたわけではない。

アケメネス朝歴代の王の伝統を踏襲し、ペルシア王に求められる義務を忠実に履行

対外遠征で大敗北を喫したのはクセルクセスだけではない

ダレイオス・・・スキュティア遠征。

キューロス・・・マッサゲタイ遠征。

ギリシア遠征で失敗したことはクセルクセスが劣った君主だという理由にならない。

クセルクセスが貶められてきた理由

ギリシア人に最大の脅威をもたらした敵だったから。

ペルシア軍のこけおどしの規模、稚拙な戦争指導、クセルクセスの傲慢と無能、臆病と残虐という二律背反な性格・・・ギリシア側を正当化するためのプロパガンダ。

敵のイメージ・・・ペルシア戦争の際に作られた敵のイメージがヘロドトス以降のギリシア人作家たちによって語り継がれ、今日に残る。

近代ヨーロッパのオリエンタリズム・・・近代のオリエント～東洋での経験と理解をレンズとして古代ギリシア人によって創作されたクセルクセス像を無批判に受け入れてきた。

優れた最高指揮官としての実績

大規模で、多様な民族と兵科から構成される遠征軍を、戦闘集団としての機能を喪失。

させることなくアテナイまで前進させた。

混成部隊の維持と運用の困難さ・・・ダレイオス時代のナクソス遠征
コミュニケーション上の問題発生。

ロジスティクス上の問題：アルタバノスの指摘（Hdt. 7. 49: 陸地その
ものが敵となり、食糧の調達に苦しめられる）。

ギリシア遠征は最初から最後までクセルクセスの戦争

ギリシア遠征の発案者であり体现者。

遠征の規模と計画の壮大さ、実施面における徹底性。

ギリシア側史料もクセルクセスの意志の強さを認めている。

ペルシア内部の反対論、慎重論に屈することなく、ギリシア遠
征を実行。

複雑な官僚機構を統御して大遠征軍を組織し、維持し続けた

→クセルクセスの非凡な才能を示している。

ヘッレスポントスに二本の船橋構築。

アトス岬に巨大な運河開削。

エーゲ海北岸に補給廠設営。

ギリシア諸都市に外交使節派遣。

ギリシア遠征の失敗を過大評価してはならない

ギリシアの地での敗北は帝国の根幹を揺るがすものではない。

エジプトやキュプロスにおける反撃の余力を残していた。